たくみ

TAKUMI

No.012

平成14年6月●初夏号

信州名匠会

（題字：故　池田三四郎　前名誉会長）

江戸から昭和初期の匠が生んだ木造建築の美と技に感銘

研修旅行「日光・宇都宮の建築」

信州名匠会の平成13年度研修旅行は、11月12・13日、27名の参加により行われた。

今回は日光田母沢御用邸をはじめ、東武ワールドスクエアーや旧篠原家などを見学。江戸・明治・大正から昭和初期にかけて匠たちが生んだ伝統的木造建築の美と技に感銘を受けた２日間であった。

東武ワールドスクエアーにて

数寄者の粋を尽くした「水琴亭」

初日、会員である村越久子氏が教鞭を取られている高崎芸術短期大学にある茶室「水琴亭・而生庵（じしょうあん）」を同氏の計らいで見学。美術科茶道文化学部の方々によるお点前をいただきながら、和風空間を味わった。水琴亭は1935年に香道家・吉田露香邸として、数寄屋建築の大家・仰木魯堂設計により東京に建てられた。90年、高弟・藤井喜三郎の手により同キャンパス内に移築・再現された。数寄者の粋を尽くした蹲踞（つくばい）"水琴窟（すいきんくつ）"を擁している。

よみがえった「日光田母沢御用邸」

1899（明治32）年に大正天皇のご静養地として造営された御用邸は、同時期に建造された御用邸の中で最も規模の大きな木造建築物とされ、当時の建築の技術や文化を今に伝える見応えのある建物。一昨年、改修工事が完了し、現在は日光田母沢御用邸記念公園として一般開放されている。午前に見学した数寄屋建築「水琴亭」と対照的にどっしりとした骨太の木造建築である。当時、この地にあった民間住宅に赤坂離宮などで使用されていた江戸中屋敷の一部を移築して造営され、その後、小規模な増改築を経て、現在の姿に至ったという。

御用邸記念公園の全景

研修旅行スナップ

水琴亭の空気にひたる参加者

御用邸の「赤坂離宮・花御殿移築部」。角長押と丸太の床柱。御用邸は、和風建築でありながら、書院造りの部屋にシャンデリアを採り入れるなど、明治以降、多くの公共建築が疑似洋風様式で建てられたように、当時の和洋折衷的な文化や時代背景も垣間見ることができた。

「7割が実習」。現場に即した授業を展開する、ものつくり大学の実習を見学

熟練技能者が指導する実習風景

研修旅行日程

11月12日(月)

長野市－高崎芸術短期大学－中禅寺湖－日光田母沢御用邸記念公園－日光東照宮－鬼怒川御苑（泊）

11月13日(火)

鬼怒川東武ワールドスクエア－大谷資料館－旧篠原家住宅－ものつくり大学－長野市

平成13年度研修旅行「日光・宇都宮の建築」参加者名簿（27名。氏名／所属）

荒井徹／㈲デザインテック、阿部忠明／サンコー特機㈱、池内信二／㈱山翠舎、岩井英一／岩井工業㈱、大井芳也／㈱山二、上別府志郎、岸本貴志・鎌田晴之／㈱本久、五明良平・五明京子／㈱五明、坂田守夫／坂田工業㈱、高梨廣男・高梨裕之・高相博邦・高梨友秀／㈲高梨建設、竹内公夫／㈱ダスキンターミニックスビホーム、塚田廣実／塚田住建、鳥羽英夫／長野サウナ販売㈱、中島健一／㈲アキプランニング、西宮登喜男／㈱綿内瓦工業、堀誠／堀建築設計事務所、溝端利一／ＭＥデザイン室、水沢仁亮／㈱二見屋、山崎邦男／山崎工務店、堀内久美子／㈱新建新聞社、宮本忠長・西澤嘉雄・小川明・古川稚佳子／㈱宮本設計

会員にきく
「たくみの仕事」Vol.5

「地場産素材の用途を拓いて四代、100周年」

藤森鉄平石株式会社　藤森吉三さん（鉄平石の採掘・加工・施工業／諏訪市）

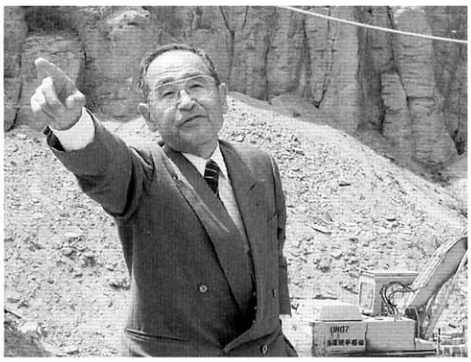
profile●昭和6（1931）年生まれ（70歳）。慶應義塾大学経済学部卒。大学卒業後、明治38（1905）年に祖父藤森権之助が創業した合資会社藤森鉄平石に入社。現在は代表取締役会長。

「鉄平石」。名づけ親は創業者

諏訪地方で産出する平らな石を、このあたりでは昔から「平石（ひらいし）」と呼び、屋根材や敷石、漬物の置石などに利用してきた。霧ヶ峰火山系のマグマが冷えて固まる際に、規則正しい割れ目が入ってできたもので、主成分は「輝石安山岩（きせきあんざんがん）」。ほぼ均一の薄い板状にはがれるという特徴を持つ。

「豊富に産出するこの石を生かして産業を起こせないか」。そう考えたのが藤森鉄平石㈱の創業者、藤森権之助だった。明治38年、中央東線の岡谷までの開業により、関東圏と鉄路で結ばれたことで需要の拡大が見込めると判断した。「首都圏とのパイプを使って新しい市場を開拓しようと考えたのでしょう」。現会長の吉三さんは三代目、権之助は祖父にあたる。

石材として売り出すためにまず、インパクトの強い商品名をということで考えたのが「鉄平石」。商標登録をしなかった。今では「広辞苑」にも、諏訪地方の特産品として紹介されている。



「多様な用途のほとんどは初代が開拓したもの。祖父と山の神に心から感謝しています」。四代目は長男・慶一社長が継いでいる。

用途開拓を脈々と

創業後、まず主要な取引先となったのが東京電燈（現東京電力）だった。地中化した電線を埋めるU字溝のふたに鉄平石が使われた。当時電力の需要は右肩あがり。鉄平石の需要も増えた。「もうけは大きかったでしょう。ただストックに必要な量も普通ではなく、資金リスクは大きかった」。一般に幅広く使れ、喜ばれる用途の模索が始まった。藤森鉄平石㈱では現在、採掘から加工、販売、施工までを一貫して担っている。鉄平石は粒子の密度が高くて硬い上、酸にも強く、色も赤系、青系などさまざま。薄く均一な板状という面白い形状の石が大量にそろう上、見た目も美しいとあって、全国の資材業者や造園業者などから引き合いが多い。住宅などの壁材のほか、外構やインターロッキング、屋根材など、使途は多岐にわたり、意匠としての需要がほとんどだ。

ただ、デザイン性だけを重視してクラック（さけめ）のある品質の悪い石を使うと、雨漏りや傷みの原因になるという。品質の良し悪しは多くが職人の技術による。「デザインを重視する人も多いが、商品として世に出す以上、機能的にもデザインの材料としても役目を果たさなければ本物ではない」と藤森さんは話す。

従業員は現在約30人。うち20人が現場作業に携わる。かつては職人の教育を一手に引き受ける優れた親方がいた。当時の職人はすべて出来高払いで、親方に一括して報酬を渡す。優れた「親方」がいるかどうかで企業の命運が決まったという。

「腕のいい職人というのは、道具を使うのは最小限。石のどこを打てば割れるのかが良く分かっているし、イメージが決まっていて、採取したその場でらくらくと形成していく。だからくずも出ないし仕事が早い。いかに要領よく、手際よくやるかで職人の腕がわかる」という。

今会社にいる職人たちで「親方」に育てられた者はわずかになったが、みな腕は確か。炎天下の採石場で、のみの音を響かせながら次々と石をはがし、形づくっていく。「不器用でも努力すればいい職人になる。器用でも自分で努力しない人はだめ。くずは使いようだが、人間のくずは使えないということです」。現場の職人を見守る目は厳しくも温かい。石とともに歩んできた年月が、あたかも鉄平石の堆積のように、固く重なって見えた。

「腕のいい職人は手抜きもうまいですよ。どこを工夫したのかわからないくらい、さりげなく手抜きしてしまうんですね」。これまで活躍してきた「名工」たちの逸話には終わりがない。

会員にきく
「たくみの仕事」Vol.6

「父から子へ。在来木造の良さを感じていただける住宅づくり」

有限会社高梨建設　高梨廣男さん（和風住宅の建築設計監理施工業／長野市）

profile●昭和23（1948）年、長野市生まれ。長野工業高校を卒業後、父から続く家業の大工になる。祖父も建築に関わった。現在は夫人と2人の息子のほか、若手の従業員ひとりの計5人で会社を営んでいる。

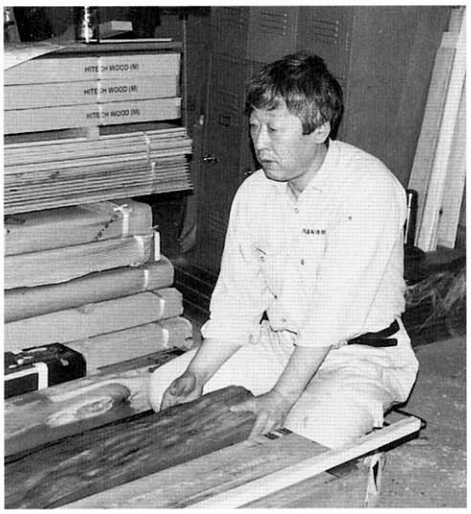
精一杯やって、末永いおつきあい

建築系の長野工業高校定時制に在学中、宮大工だった父が亡くなり、急きょあとを継ぐことになった。当時20歳。中学のときから父について仕事を仕込まれたとはいえ、まだやっと成人したばかり。「現場の経験もなく、知らないことばかり。父の古い手本を引っ張り出しては確認するような毎日でした」。

23歳のとき、初めて新築の家を請け負った。35坪、荒壁、杉の柱。「ちょうどオイルショックで、（資材の単価などが上昇したため）ほとんどの工務店が再契約をしたんです」という。しかし高梨さんは「利益が少なくなっても、契約したときの金額で建てよう」と思い、実際そうした。

そのときのお宅とは、世代が代わった今もおつきあいが続いている。細かい修理などを定期的に頼まれる。「技術がすぐれた職人というのはほかにもたくさんいる。私は自分にやれることを精一杯やろうと思った。便利屋、小遣いみたいなものです」と笑う。

今でもお得意さんの6割以上は、父の時代から引き継いだ客。小さな仕事でも丁寧に、誠意をもってやっていくのが信条だ。「昔父親が言った言葉です。『金は借りてくることができるが、信用は借りられない』と。確かにそのとおりだと思う。信用を得るには長い時間がかかりますからね」。



「『地球の表面にあるものは自然に還る、地の底から出てきたものは還らない』と言いますね。日本の伝統的な家は木と紙、土と石からできているから土に還るんです」

感性を磨き、数寄屋に取り組みたい

現在、長男は主に監理、次男は施工を担当する。子供たちに家業を継ぐことを強制したことはない。2人が小さい頃、「お父さんはこの仕事で食べている。お前たちは何をやってもいいが、うちの代々の家業は大工だよ」と話してきた。現在、2人ともこの道を選び、ともに進んでいる。

次男は高校卒業後、全寮制の建築専門学校に入学。本格的な在来工法の大工を育成するというその学校で、4年間みっちり建築を勉強した。その成果を今発揮させている。

自身もまた、勉強家だ。家づくりの勉強会などにもたびたび参加する。しかし、信条に合わないものは造らない。「高気密・高断熱はどうも納得できない。金物にしても、代用できるものがいくらでもあるはずなのに」という。「日本人は新しいもの好きだと思う。本当はいいものを長く使うのが良いことではないですか」。自然の木材を使った、寿命の長い家をつくり続けてきた自負が垣間見える。「結局自然のものが一番強いんです。自然というのはうまくできていると思いますよ。昔の人が経験でやってきたことを今は否定してしまっているね」。

左から高相博邦さん、高梨さん、長男裕之さん、次男友秀さん

施工するのは一般の在来木造住宅が中心。宮大工だった父親も住宅を多く手がけていたが、高梨さんの代になって住宅専門になった。数奇屋をやってみたいという。「一番難しいのは数奇屋ではないかな。宮大工にはある程度マニュアルがあるが、数奇屋には感性が必要になってくる。感性というのは一人ひとりみんな違う。仕事以外の世界をどんどん広げていかなければ感性は身につかないと思いますね」。日々、勉強をしながら、数奇屋を手がける同業者などからも教えを受ける。

「何かの頭になる人はやはり努力した人。不器用でも努力した人でしょうね」。常日頃から思うことですと言って言葉を結んだ。

定例研修会●Report

（平成13年12月～平成14年4月）

【フォーラム森と住まいと匠の技】

平成13年12月4日
長野県・(財)県建築住宅センター・県産材振興対策協議会の主催で、メルパルクNAGANOにて。
会からの参加者26名

ふるさとの木の文化。そのルネッサンスをめざす

信州名匠会からは松下重雄・宮澤郁夫の各氏がパネラーとして、また降旗廣信副会長が鼎談に参加。ロビーでは、会員による在来工法の接合法の実物が展示紹介された。

降旗氏は、ご自身が手がけられた築200年以上を経た茅葺き屋根の民家再生を、再生前と後の写真を映写しながら紹介。「200年前のデザインですが、今日も多くの人たちの心を動かします。伝統を根底におきながら、新旧のバランス、和洋の均衡などの、絶妙の効果をもたらす『再生の発想』は日本固有の文化となる可能性がある」と強調した。

【忘年会】

平成13年12月25日、三井ガーデンホテル長野「四川賓館」にて、参加者23名

【新年会】

平成14年1月29日、三井ガーデンホテル長野「四川賓館」にて、参加者32名

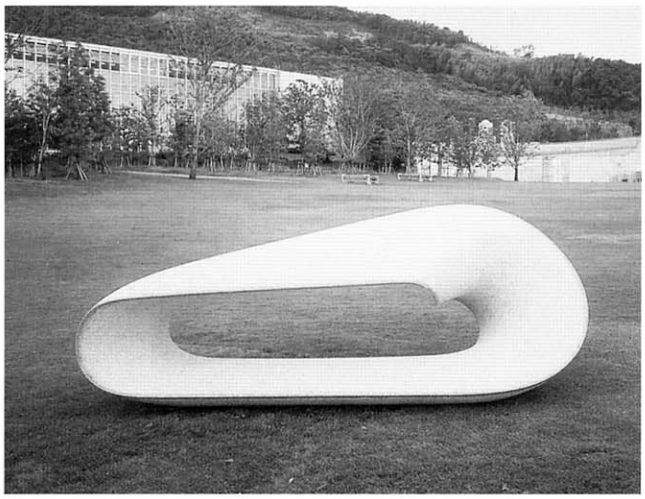
【石のはなし】

黒御影石の作品を前に、磨きについて説明する上別府氏

平成14年2月28日
講師：石材彫刻家　上別府志郎氏（北御牧村）
参加者：25名

石が相手の日々、波のごとくに

上別府氏は北御牧村八重原にアトリエを構え、二紀展で多くの賞を受賞され、県内外に多くの作品がモニュメントとして展示されている。素材となる御影石や大理石について、「同じ種類の石でも産地によって硬さや模様、結晶の粗さなどがまったく異なります。作品のイメージに適した材料を国内外に求め、探し出すことから仕事は始まります」。割り方、削り方、磨き方と話しは進み、「石材彫刻は削りすぎると足すことができないので、大変な根気と労力と神経を使います」、「砥石を相当かけても、手で触ってみるとざらざらしている。凹凸を感じる人間の手の感覚というのは、想像以上に繊細」と、それぞれの工程の工夫と彫刻の魅力を熱く語られた。



「波－wave」

【桐箱のはなし】

桐箱や道具を参加者に手渡しながら説明する山中さん（右）

平成14年3月27日
講師：山中桐箱店主宰　山中袈裟嗣氏（長野市）
参加者24名

蓋と本体が吸い付くように締まる美しの技

山中さんは、長野市内の工房でお父様より技術を学ばれ、福井県永平寺に納める経文箱の制作を特命されるなど、正確かつ熟練の技ですばらしい桐箱、桐製品を作られている。桐の性質は、柔らかくて、アクが強いこと。十分なアク抜きをされていない材は黒くブチになってしまうなど、取り扱いに容易ではない。しかしこのアクの強さが、燃えにくくて水にも強いという長所をもたらしている。材の軽さと湿気を調整する性質とあいまって、大切なお宝を納める箱の材として最適といわれる。桐の長所を生かすのは職人の技。蓋と本体がしっくりと吸い付くように締まり、たとえ水の中に落としても絶対、水が入ってこない。まさに極薄のカンナくず１枚の調整が要求される緻密な仕事ぶりを、見せていただいた。お宝を納める山中さんの桐箱それ自体が、価値の高い作品といえる。参加者は口々に、その美と技をたたえていた。

【陶芸体験】

制作に取り組む村越さん

平成14年4月27日
講師：雪しろ窯　村越久子氏（武石村）
参加者27名

やきものの道は険し

参加者はそれぞれ、茶碗や皿、灰皿や徳利など、思い思いの作品制作に挑んだ。村越さんは土をこねる、のばすという作業の大切さを、次のように語りかけた。「目的は、土の中の空気を抜くことと細かいゴミを取り除くこと。ゴミを付けたまま形成して焼くと、素焼きの段階でゴミが燃焼して、その部分が気泡になり、本焼きの段階で爆発してしまう。土に圧力をかけて"殺して"おかないと、窯の中で生き返って暴れる。ほかの作品もみんな巻き添えになってしまうんです」。制作後、参加者の作品が一堂に並べられ、自由な発想の作品に村越さんは「甲乙付けがたい。大変良くできています」と講評された。焼き上がった作品は6月の総会で展示し、優秀作品には記念品が贈呈される。

●新会員紹介（平成14年5月現在）〈職種・氏名・会社名・住所・TEL〉

○石材輸入販売★中村泉★ビーイング上田★上田市常田3-4-18★0268-28-9327 ○建築設計監理★竹村利之★(株)竹村建築設計事務所★長野市北長池96-1★026-244-2951 ○刀匠★宮入恵★埴科郡坂城町昭和通り6354★0268-82-2984 ○曳家（ひきや）★金田勝良★(有)金田工業所★須坂市春木町514★026-245-0729 ○建築設計監理★小川明★長野市中越1-8-19★026-263-1270

[新賛助会員]○木工業★山崎慎一郎★(有)山崎屋木工製作所★更埴市大字中字前久保555-1★026-272-2765 ○設備機器販売★高木茂実★松田産業(株)★長野市大字南長池字古新田369-5★026-243-3222

●平成14年度総会開催のおしらせ

本年度の総会を、下記の日程にて開催いたします。みなさまお誘い合わせて、ご出席くださいますよう、お願いいたします。

○ 日時／平成14年6月21日（金）
　受付開始：15時　　開会：15時時30分
　藤森照信会長の講演会：16時15分～約90分
　演題「素人が作った建物のおもしろさ―世界と日本の例から―」　懇親会：18時～
○ 会場／メルパルクNAGANO 3F（長野駅より徒歩2分）

たくみ No.012
［信州名匠会ニュース］
発行日：平成14年6月15日
発行者：信州名匠会　会長　藤森照信
編集者：信州名匠会事務局
製作者：文屋
制作協力：(株)新建新聞社
連絡先：(株)宮本忠長建築設計事務所
事務局：西澤嘉雄・市村友慎・古川稚佳子　〒381-0012　長野市柳原1875-1
TEL：026-241-5510　FAX：026-243-0187